
仮面ライダーメシア

バツシャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーメシア

【Nコード】

N4053E

【作者名】

バッシャー

【あらすじ】

不思議な島で起こる出来事。運命は容赦なく少年達に襲い掛かる。二人のライダー、一つの運命

プロローグ（前書き）

全てオリジナルの設定です。それでも大丈夫な方のみ読んでください。

プロローグ

「希望島」

人々は言う。どんな人間でも希望を与えられる。

けど、今は・・・

「このままじゃ、この島は終るな」

一人の少年は海岸で広い海を見つめながら呟いた。

その少年の言う通り、希望島では悪魔が存在した。

「島魔」

人々は口々に言う。

一人の少年はその運命を真摯に受け止め、戦う事を決意し、
「はあくあ」

もう一人の少年は何も知らずに運命を受け入れる事になる。

STAGE 1 覚醒

希望島

ここは長い間、平和が保たれていた。

藤林学園

「はあゝあ」

少年・瀬名^{せなり}稜^{りょう}は図書室で欠伸を漏らしていた。稜は学園内で問題児の一人だ。

ちなみに高等部の二年である。

「渚あゝ居る？」

不意に聞こえてくる少女の声。その次に図書室のドアが開く。

「あつ、稜君。渚知らない？」

その少女は稜の一学年上の先輩であり、藤林学園の学園長の孫娘・藤林可^{ふじはやしかなこ}南子^{みなこ}だ。

「一ノ瀬先輩ならさつき体育館に行きましたよ」

稜はすぐに身なりを整える。

「あゝあの馬鹿っ！稜君、ありがとう」

可南子はそのまま、物々と呟き図書室から退室していった。

「騒がしい人だなあ」

しみじみ呟いて顔を伏せた。

ガシャン！

壊れそうな勢いでドアが開かれた。そこにはまた少女が立っていた。だがさつきとは異なる雰囲気を感じていた。

「稜！あんた何、放課後までサボってるのよ！」

稜に怒声が浴びせられる。その少女の名は宮沢エリス

「ごめん、なんとなく」

顔を伏せたまま手を振る。

「ほらっ、もう下校時刻よ」

エリスは左手に持つてるバックを稜に投げ付ける。稜はそれを掴もうとするが勢いのあまり、受け止められなかった。

「痛えーだろうが!」

「罰よ、罰」

「ちっ、仕方ねえ、今回は許してやるよ」

「さっ、帰りましょう」

二人は幼馴染でこのやり取りが日常茶飯事だった。その後二人は下校した。

そしてもう一人の少年・一ノ瀬渚いちのせななき

彼は可南子によって屋上に追い詰められていた。

「もう、逃げ場は無いわよ!」

あくまで強気を見せる可南子、渚はそのままフェンスの先を見渡す。

「可南子、豊ゆたかは?」

「関係ないでしょっ!」

「いや・・・関係ある、今日メシアが覚醒する。」

態度を変えずに渚は告げる。可南子もそのままフェンスの先を見る。

「嘘っ・・・」

可南子はそのまま両膝をつき、震える体を抑える。

「ちっ、十年ぶり・・・か」

取り敢えず、渚はそのまま可南子を抱え、保健室に直行した。

「ねえ、知ってる?ここで事件があったの?」

「事件?」

二人が談笑しながら帰路に着いてるときにエリスが言った。

「うん、なんかねここのトンネルで人が二人、惨殺されたって事件」

「それいつ?」

稜は珍しく真顔で尋ねた。

「ええ」と、確か一昨日だった・・・かな?」

「通って見よう」

稜は足を踏み出す。エリスは動揺しながら稜の後ろについていく事にした

「あはは、ごめん。今行くよ」

『たくつ、お前は可南子の彼氏だろ？もしこれ以上迷惑掛けるようなら学園長に言いつけるぞ』

「それやめて！退学になりかねないからっ！」

『分かったよ、保健室に置いておく』

「置いておくって、可南子は物じゃないんだよ？」

『メシアが覚醒する、じゃあな』

少年・柊豊ひいらぎゆたかは電話を切り、踵を返して学園に駆け戻る。

「メシア・・・か」

「もう帰ろうよ、稜」

「ここか」

エリスが駄々をこねている内に目的地に着いていた。辺り一面にはペンキで塗り潰されたように赤い血が広がっていた。

「もう帰ろうよ」

さつきからエリスが呟いている言葉が耳に入らなくなってきた稜。

稜はその血に触れた瞬間、

右手首のブレスレットが光った。

「なんだ、これ！」

慌てて手を押さえる稜、その瞬間
カサッ！

何かを切り裂く音、稜は頬を抑えた。赤い液体、血が頬から流れ落ちる。そして目の前には人間とは明らかに違う生物、怪物が存在した。

「きしゃっ！」

異様な声を上げ、ゆっくりと稜に近づく。

「逃げよう、稜！」

エリスが声をかけるが稜は反応しない。そこへ渚はやってくる。

「稜！お前は選ばれし者なんだ！戦え！救世主として」

「救世主？戦う？」

稜は訳も分からず、右手を自分の胸元まで持っていく。

「変身っ！」

それから稜の姿は変わった。

STAGE 1 覚醒（後書き）

と言う訳で第一話です。今後からキャラのプロフィールを書いて行くことと思います。

S T A G E 2 真紅の戦士（前書き）

分かり難い所もあるかも知れませんがよろしくお願いいたします。

STAGE 2 真紅の戦士

赤い騎士。

その姿を見て、渚は確信した。

「ついに、覚醒した。仮面ライダーメシアが……」

メシアは目の前の怪人と対峙する。

「一ノ瀬先輩！なんですか？これは！」

「説明は後だ！取り敢えず戦え！」

「はいっ！」

メシアはそのまま蜘蛛型の怪人を抑える。渚は自分の指を少しだけ切り、その血を地面に引く

「我が監視者の名において、結界を張る事を命ずる！」

渚が叫んだ瞬間。ドーム状のバリアが展開され、トンネル内部だけ空間が閉鎖される。

「思う存分暴れてくれて……何やられてるんだよ！」

渚が結界張り終わった時にメシアは倒れていた。

「先輩、どうすればいいすんか？」

「喧嘩……した事はあるか？」

「はい」

「その通りにやればいい」

「分かりました」

再びメシアは怪人に向かっていく。痺れを切らした渚も鉄の棒を拾い、向かう。

藤林学園・保健室

「大丈夫？」

「うん、ありがとう。豊」

外は曇り、雨が降り出した。

「渚は？」

可南子は豊に尋ねた。

「感じないかい？島魔の気配を」

豊は自分の指輪を見た。蒼く輝いていた。

「そんな・・・」

可南子はそのまま呆然としていた。

「うおおっ！」

ガスン！

鉄棒で強く殴る。

「今だ！稜！」

渚は叫ぶと同時にメシアの蹴りが飛んだ。

「きしゃやっ！」

異様な声で鳴く。そのまま渚を殴り飛ばす。

「こいつ、見たことあるぞ。確か十年前にも出てきたよな？」

怪人は渚の問い掛けにも答えない。渚は鉄の棒を握り直す。

「先輩！僕がやります」

メシアは跳躍、そのまま光輝く右足を突き出す。

ドンッ！

「ぐわああっ！」

そのまま蜘蛛型怪人は消滅した。

「ふう〜」

渚はため息をついて、鉄の棒を投げ捨てる。

「エリス、居るか？」

「はっ！はい」

「豊と可南子を呼んできてくれっ！」

「はい」

渚は結界を解くとエリスを学園に向かわせ、変身を解いた稜に近寄る。

「先輩」

「どうした？」

「あれ・・・なんです?」

「ちよつと待つてる!」

「先輩!」

稜は渚の胸元を掴み、壁に叩きつける。

「僕は死に掛けたんです!なのにいきなり戦えって、もう訳が分かりませんよ」

稜の手が震えていた。

30分たった頃、豊と可南子は稜達の許へとたどり着いていた。

「可南子、稜の怪我を先に治してやってくれ」

うん、と可南子は頷いて稜の方へと行った。渚は立ち上がり豊と話していた。

「派手に暴れたね」

「うるさい」

「まあ、仕方ないか」

「稜を学園長の所に連れていく」

「本気かい?」

「ああ、やつはもう運命を受け入れなきゃいけない」

「でも、彼にその覚悟があると思うかい?」

「なかつたら、俺がアナザーメシアになるだけだ」

あはは、と豊は笑って話を濁した。渚は稜の腕を引いて、エリスの前で立ち止まる。

「エリス、君は引き返す事が出来る。どうする?」

渚の問い掛けにエリスは無言で頷く。

「なら来い、お前らに全部教える」

藤林学園・地下

「失礼します」

渚は稜とエリスを連れ、地下の大広間に来た。中央に座る初老の人

「渚か、その二人は誰だ?」

「メシアの継承者ですとその連れです、この二人に説明を願います」

「その前に可南子は何処だ？」

「いえ、それよ「可南子は何処だ？」

渚ははあくため息を吐く可南子は豊と一緒に居る事を告げる。

「あの男」「それよりご説明願います。藤林学園長」

渚は一礼、その場を後にして現場へと戻る。

二人はただ呆然と立ち尽くす。そこへ戻ってきた渚

「豊、後始末は？」

「うん、出来たよ。けど・・・」

豊の横には体を震わせ、座り込む可南子

「豊は可南子を送っていけ、俺はもう少し此処に居る」

「分かった。でも明日は会議だから無理はしないように」

渚は苦笑し、手を振りながら言った。

「ふんっ、お前は彼女の心配でもしてる！」

豊は「分かった」と笑いながら言って、その場から消した。渚はそのトンネルを眺める。

「始まった。それでもう、俺達は引き返せない」

渚は決意をした。

STAGE 2 真紅の戦士（後書き）

前回、予告した通りにキャラのプロフィールを書きます。

せなりよう
瀬名稜

性別 男

年齢 17

藤林学園高等部二年

学園では問題児の一人だが本人にその自覚はなし。渚から図書室の鍵を受け取っており、本人は暇ならばそこで昼寝をする。なお成績は定期テストを受けない為、分からない。

STAGE 3 嵐の予感

渚は希望浜と呼ばれる浜辺に来ていた。そこにぽつんと立つ一つの墓石

「どうか、稜をお守りください」

渚は黙祷する。そして後ろへ振り向く。そこには二人の姿。一人は少年、もう一人は少女。渚の大親友の二人。豊と可南子だ。

「やつほ！渚も来てたんだ」

先日の出来事が嘘のような可南子の態度

「ああ、そういってお前らはデートか？」

その問いには苦笑しながら豊が答えた。

「まさか、僕達もさつき合流したばかりなんだ」

「まるで以心伝心してるみたいだな」

「あはは、いくら僕らでもそこまでの力は持ってないさ」

「そうだな」

渚は苦笑し、二人に手を振って浜辺を後にする。

学園長の言葉から始まる朝会。稜は聞き流し、先日の事を考えながら自分の右手首に着いているブレスレットを眺めていた。教師に何回も注意されたがそれすらも耳に入らない。稜は授業をサボり、渚から受け取った鍵を使い図書室の椅子に座り、顔を伏せてそのまま眠りについた。

屋上

藤林学園は希望島中央に立っている。そのため屋上に行けば島全体を見渡せる。

「はいよ！」

豊は渚に缶ジュースを投げ渡し、フェンスに腰かけた。

「で、話って何だ？」

渚は豊の方を向いた。

「今後の事について、渚はどうする？」

「稜と一緒に戦う」

豊の問いに渚は即答した。少しの間が空く

「で、お前は どうする？」

次は渚が問い掛けた。豊は答えた。

「僕は戦わない、前の可南子の反応を見たたる？あのままじゃ、何時か精神がおかしくなっちまう。だから出来るだけ、普通の子として過ごしてもらいたい」

「・・・そうか」

渚は上を向いた。空は曇っていた。

事件が起きたのは二時間後。

渚と稜は海へ来ていた。漁師が何かに襲われ、行方不明だと言う。

「稜、お前は準備しておけよ。囀は俺がやる」

そう言った渚は海の波に近づく。その瞬間、ハリが飛んだ

「海の中か・・・よし」

渚は浜辺に戻り、持ってきておいた先が鋭くなっている鉄の棒をがむしゃらに投げる。

鈍い音が鳴り、海からその化け物が飛び出した。

「稜！」

渚が合図を出すと、稜は右手首のブレスレットを近づ、ベルトが出現する。

「変身っ！」

稜の姿が変わり、仮面ライダーメシアに姿を変える。

「あいつはファイルナンバー34、ジェリーだ。二年前に確認された」

渚はそれだけ言うと、後方に下がりメシアにタッチする。入れ替わるようにメシアが一直線にジェリー目掛けて疾走する。

「はあっ！」

力強く、メシアの拳がジェリーに叩きつけられる。

「!?!」

異様な反応を見せるジェリー、メシアはさらに猛攻を仕掛ける。

「テヤツ!」

ジェリーを蹴り飛ばす、キック力。そしてジェリーを怯ませるパンチ力。どれもジェリーの戦闘能力を超えていた。だが・・・

「稜!下がれ!」

「大丈夫です!こんな奴」

渚の忠告を無視して、さらなる攻撃を続ける。メシアの回し蹴りが直撃した時だった。ジェリーが距離を離し、先程、渚を襲ったハリを乱射した。

「何!?!うわっ!」

そのハリは殆どがメシアに直撃、メシアは膝をつく。そしてジェリーの攻撃が続く。

「このっ!」

渚はジェリーを押さえ、メシアに言い放った。

「お前はまだ死ぬことを許されない!戦うんだ、お前はそれだけの力を持つてるんだから」

メシアは両手で握り拳を作り、立ち上がり、空高く跳躍した。渚は離れ呟いた。

「メシアの必殺技の一つ、メシア・パニッシュ」

メシアの右足は輝き、ジェリー目掛けて蹴り込む。その光はジェリーを飲み込み、体を爆散させた。

「はあ〜」

大きいため息を吐き、変身を解いた直後、右手首のブレスレットが緑色に輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4053e/>

仮面ライダーメシア

2010年10月12日06時58分発行